

カトリック 仙台教区報

No.245 2021年12月5日

発行: カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任: 仙台教区広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>

〈平和旬間〉平和を求めるミサ



8月8日(日)、仙台教区カテドラル・元寺小路教会では、2021年度の平和旬間ミサが佐々木博神父によって、ささげられました。



仙台教区の各小教区でもこの平和旬間中の主日に「平和を求めるミサ」がささげられました。

佐々木神父は説教で「皆さん、平和旬間って、ご存じですか？」と親しく尋ねることで始められました。「私たちは、去年、教皇フランシスコを日本にお迎えしましたが、この教皇フランシスコの前の前の教皇ヨハネ・パウロ二世は1981年、最初に日本に来られました。東京と広島、長崎を訪問されたのですが、最初に原爆が落とされた広島で『平和アピール』を全世界に向けて発表されま

した。その中で、大変印象に残る言葉があり、世界中の人々の心を打ちました。それは、『戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です』というものでした。

教皇は『私は平和の巡礼者として、日本にきました』『過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです』とも話されました。

この教皇の言葉を受け、日本のカトリック司教団は、広島と長崎に原爆が投下された8月6日、9日を含む、8月6日から15日の10日間を毎年、『平和旬間』として記念し、心を合わせて祈りましょう、と決めました。このことをいつも思い出しながら、今日は特に、平和のために祈り、ミサを続けていきましょう。』と締めくくりました。

コロナ禍とはいえ、ミサがささげられたことを喜び、元寺小路教会には、約100人の参加者も、心を一つにして祈りをささげました。

教区の諸活動

信仰の旅路をともに分かち合おう Share the Journey

今年度より仙台教区青年会の代表となりました先崎まこと申します。この場をお借りしてご挨拶申しあげます。

さて、私たち仙台教区青年会は顧問司祭のメヒア・タディオ・ラファエル神父さまと世界各国から日本にやってきた仲間たちと共に活動しています。特に今年度は、顧問司祭と代表が新たになり、仙台教区青年会の新しい旅路がはじまったと言えるでしょう。そして、集まった青年が同じ信仰の旅路を分かち合うことができるよう、青年のためのミサやミーティング、交流会等を随時開催しています。



青年会のミーティング

しかしながら、コロナ禍での活動にはさまざまな制約があります。みんなで一生懸命準備した企画も新型コロナウイルス感染症拡大を理由に、内容の変更や中止とせざるを得ないこともあります。8月に予定していたサマーキャンプは、9月に延期し、なんとか実施する方法がないか模索しました。ですが、日々深刻化する状況を前に、皆で話し合い「中止」という決断を下しました。この経験を通して、改めて一つ一つの活動を大切にしなければならないと実感させられました。



その中で、8月4日(水)にラファエル神父さまの司祭叙階3周年を記念するミサを石巻教会でささげられたことは大きな喜びです。この日は青年会メンバーに加え、グアダルペ宣教会の日本管区長、高木神学生、石巻教会の信徒のみなさんがお祝いに集まりました。

そして、青年会からささやかなプレゼントとして桜をモチーフにしたメッセージカードを贈りました。桜を選んだ理由は、ラファエル神父

さまが司祭叙階式で初めて袖を通した力ズラにたくさんの桜が刺繡されていたこと、日本での宣教の思い出にとの思いが込められています。このように、ラファエル神父さまに日頃の感謝を伝え、これからも神さまから与られた司祭職を全うできるよう祈る、大変貴重な1日となりました。



青年会からメッセージカードを贈られたラファエル神父

また、初の試みとして9月上旬にオンラインでロザリオの祈りをおささげしました。新型コロナウイルス感染症の収束を願い、各連の意向は青年たちが自ら考えました。ミサの非公開に伴い活動できない状態が続いていたため、オンラインでもつながりを意識することができました。この2つの活動の様子は公式の YouTube、Instagram、Facebook で公開していますので、ぜひご覧ください!!



さらに、9月下旬に全教区合同のカトリック青年連絡協議会が年に2回行なっている運営委員会にオブザーバー教区として出席しました。この委員会の目的は、各地の青年活動についての情報共有です。また、委員会の計らいによってオリエンス宗教研究所の週刊「こじか」(10月10日付 No. 2755号)に仙台教区青年会の紹介を載せていただくことができました。

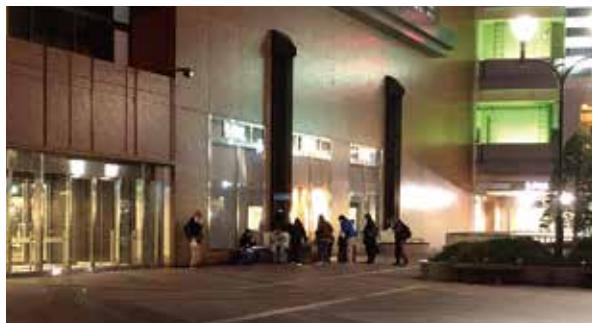
それぞれが違う道を歩み、神さまの力によって集められた私たちは「祈りと交流」を通して一つになれる信じています。仙台教区青年会の新しい旅路はまだ始まったばかりです。これからも、神さまの呼びかけに応え、集まった青年たちが同じ信仰の旅路を分かちえるように活動していきたいと思います。

カトリック仙台教区青年会代表 先崎 まこ

なぜホームレス支援を続けるのか、現場から見えてくる私たちの社会 カトリック正義と平和仙台協議会・NPO法人 萌友 勉強会

8月8日、元寺小路教会大聖堂にてカトリック正義と平和仙台協議会(以下、仙台正平協)・NPO法人萌友(ほうゆう)の共催でホームレス支援についての勉強会を行いました。

元々は夏休みNPOボランティア体験に参加した高校生7人のオリエンテーションとして企画しましたが、せっかくの機会と思い近隣教会にもお声がけして約60人もの方々にご参加いただき、入門編として全体像のお話をさせてもらいました。高校生の方々は炊出し・食事会の活動へ2日間参加してもらい、現場でホームレスの方々と直接関わり、新たな気づきがたくさんあったのではないかとうれしく思っております。それだけでもありがたいことですが、どうしても現場だけでは説明が難しい、しかしどうしても聞いてもらいたい……長年気後れしていた思いを「やあるなら今しかねえ」と奮い立たせ、今回企画の運びとなりました。



まず「孤独」について、生活困窮は「お金がない」とこと「社会的孤立」をセットで考える必要があります。相談や助けてくれるような信頼できる家族・知人がいない状態は困窮状態をより深めます。

孤独が長引くほど自身を鼓舞することも、生きる意味を見出す気持ちも弱まり「SOS」の声が出せなくなってしまいます。ずっと抱えている心の傷、親からの虐待なども関係していると思われます。

もう一つは世の中に根付いている「自己責任論」です。「怠けたんだから自業自得」「今すぐ働けば」「好きで路上生活してるんでしょ」これは頑張りや能力の高い人が優れているという価値観で能力や稼ぎの低い人は侮蔑し冷遇していいことになります。途上国、被災、障害、高齢、ひとり親、子どもの貧困、フードバンクなど、これらの支援とホームレス支援で何となく疎外感を感じるのもこの辺でしょう「偽善だ」「何で怠け者にごはんあげるの?」と私たちが辛酸をなめることもしばしば、信徒の方から頂戴することもありとても悲しくなります。

例えば、連絡先、住所、保証人のない人が雇用や賃貸の契約を結べるでしょうか? ベンチに不自然な間仕切り(肘かけ?)を設け、(このような造形を排除アートと言います)ホームレスの方が寝られない公園に私たちは安堵していないでしょうか? 安全が約束されない出会いを避け、「どなたでもどうぞ」という場所の「どなた」からも閉め出されることは私たち=社会です。自立が難しいことや帰属できないのはホームレスの方のせいとは言い切れません。最近、近隣教会から「住むところがない人が教会に来たんです、うちでは何もできないので何とかして欲しい」と連絡をいただくことが増えています。もう、応援されたり、蔑まれたり、労をねぎらわれたり、丸投げされたり、こっちも心がぐちゃぐちゃです。(苦笑)

ちなみに「何されるか分からぬから怖い」と言う未知への恐怖ですが、寝ているところを襲撃したり、台風の避難所から追い出したり、生活保護申請を拒む役所の水際作戦のほうが恐ろしくないでしょうか? 每晩安心してぐっすり寝てると言うホームレスの方の話を私は聞いたことがありません。

さて、昨年の10万円給付ではホームレスの方でも申請ができると案内がありサポートしましたが、実際は窓口でのたらい回しや例外的な手続きに困惑し途中で断念してしまう方も。今年はワクチン接種、住所・身元証明がない方でも接種できる方法を考えてほしいと市への提案・協議を重ね、画期的な仕組みを考えていただくことができました。微力ですが役所から「どなた」にまぜてもらうことができたのかなとうれしく思いました。

孤独を抱えた方の「SOS」を聞くために私たちは食事を提供します。「今日は寒いね」「体調どう?」世間話から始まり「美味しかった、豚汁で温まったよ」と笑顔に出会います。何ヵ月も何年も会話を重ね、関わり続け信頼関係を構築します。いつの日か「いやあ実はさ…」と打ち明けられるまで待ち続けます。

気の遠くなる支援と世の中の在り方を多くの人に、特に若い方へ聞いてもらいたかったという報告をさせてもらいました。進む孤立社会や労働環境、孤独や葛藤の中で生活している人は計り知れませんが、それを専門に助けてくれる法律や制度はありません。可能性があるのは人とのつながりや人を想う想像力なのかなと思います。

笑顔と尊厳の回復を願いおにぎりを握り、私たちはまた会いに行きます。

みなさんの教会に困っている人やホームレスの方が助けを求めていたら、どうしますか?

NPO法人 萌友 芳賀 隆太朗(北仙台教会)

各地区からのお便り

第1地区より

〈本町教会〉さよならマリア院

殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会は終戦直後の混乱期、(財)青森慈恵会から戦災孤児らの育児院開設設計画への協力を依頼されたことから、1946(昭和21)年11月にシスターを派遣し、翌月、青森聖母園マリア院を開設しました。



マリア院開設当時の
子どもたちと
シスター



シスター方はそれ以来、家庭での養育が困難な子どもたちを引き受け、毎日の祈りをささげながら、子どもたちの成長を、日夜献身的に支え続けました。



カストロベルデ・パトリック神父と
殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会のシスターたちとともに

しかし、諸事情から青森聖母園マリア院は5月12日(水)に閉所が決まり、5月9日(日)、聖体拝領の集いで青森聖母園マリア院への感謝の祈りがささげられました。出席した信者らは最後まで、シスター方との別れを惜しみ、シスター方は北海道の各マリア院に分かれて赴任していきました。

泉ジオンちゃん受洗おめでとう！



9月5日(日)、聖体拝領の集いで、幼児の洗礼式が行われました。洗礼を受けたのは、2020年12月4日生まれで0歳9ヶ月のゼノ泉ジオンちゃんです。

ジオンちゃんは、外ヶ浜町に住む泉隆司さんと泉マリサさんの次女で、代母を小坂マナ・マリーさんが務めました。司式のカストロベルデ・パトリック神父様に洗礼水を注がれたジオンちゃんは、列席した信者らに見守られながら、温かい拍手を受けました。

外崎 拓 (本町教会)

第2地区より

〈八戸塩町教会〉受洗と初聖体の喜び



受洗されたフランシスコ久保田さん(左)と
代父の藤村さん(右) 中央は佐藤修神父

コロナ禍、4月3日の復活徹夜祭のミサで、久保田真澄さんがフランシスコの洗礼名で受洗の恵みをいただきました。久保田さんは八戸聖ウルスラ学院で長年教職に携わっており、代父は先輩の同僚、藤村重實さんです。ご家族は塩町教会の熱心な信徒です。



8月15日の聖母被昇天の祭日には、3年生の田野瀬博樹君と1年生の吉田クララさんが初聖体のお恵みをいただきました。

コロナ禍が続く日々ですが、1日も早く平常の教会活動が再開されるよう祈っています。

谷地中 誠（八戸塩町教会）

第3地区より

〈四ツ家教会〉 ベトナムの若者たちとともに

仙台教区内の各教会と同様、昨年あたりから盛岡の四ツ家教会にもベトナムの若者たちが日曜のミサに顔を出すようになりました。彼らは非常に明るくてまじめ。高齢者が多い教会の中に元気を運んでくれています。彼らはこの春まで仙台からフォン神父様を招き、何度かベトナム語ミサを行い、約80人の岩手県内にいるベトナムの青年たちが集い、敬虔な祈りをささげていきました。



フォン師が仙台から転出された後も、ベトナム人司祭のタン・ヒ師（新潟教区／秋田県大館教会）を盛岡に招いて、この夏もベトナム語のミサを行います。コロナ禍の中にあって、せっかく同胞が集まつても歌つたり踊つたり食べたりできないのが気の毒に思いますが、統率の取れた振る舞いには感心させられています。リーダーの一人から私たちの教会に寄稿がありましたのでご紹介したいと思います。

真山 重博（四ツ家教会）

岩手のベトナム人・カトリック・グループ 一周年を記念して

グエン・ヴァン・チー

神父様方をはじめ、シスター方、四ツ家教会共同体の皆様

私たち「岩手のベトナム人・カトリック・グループ」が一周年になるのを記念して、喜びと感謝のうちに皆様にお礼を申しあげます。

まず、このグループを成立させ、導き、支え、見守ってくださっている神様に感謝し、皆様にも感謝いたします。

今日、振り返ってみると、一年というのは単なる数のことではなく、それは神様の恵みであり、限りない愛と慈しみが注がれていたことを感じます。私たちはそれぞれの理由で来日していますが、ここで皆様はいつも温かい心で私たちベトナム人グループを受け入れてくださり、岩手の家族の一員のように共にいて、支え、同伴してくださっていることは私たちにとって大きな意味があり、言葉には言い表せないくらい感謝の気持ちでいっぱいです。

キリストの死と復活に合わせて、このベトナム人グループを存続させるためには、たくさんの困難や苦しみがありますが、喜びもたくさんあると私たちは身をもって実感しています。どんなときにも守護者の聖人の模範に倣って、神様のみ国のために熱心に神の愛を証ししていくことができますように、恵みを願いながら頑張ってまいりたいと思います。

私たちのグループはまだ1歳の子どものように、これから成長していくためには、まだまだお世話になり、ご迷惑もおかけすることでしょう。でも成長していくためには自分たちだけでは絶対にできません。まだまだ未熟な私たちのために引き続き、温かい心、温かい目で支え、見守ってくださいますように。どうぞよろしくお願ひいたします。

神様の豊かな恵みが、神父様方をはじめシスター方、四ツ家教会共同体の皆様の上に豊かに注がれますように心を合わせてお祈り申しあげます。ありがとうございました。

第7地区より

〈松木町教会・野田町教会〉 コロナ禍の外国人支援について

2020年7月から福島市に住むコロナ禍で困っている外国人の支援活動を、松木町教会と野田町教会合同で始めました。福島市には、日本人と結婚して来日した人、技能実習生、留学生など多くの外国人が住んでいます。外国人に、多くのネットワークを持っている佐久間アリスさんに調べてもらうと、コロナ禍により職を失ったり、アルバイトがなくなったりして、物質的にも精神的にも不安な生活をしている24世帯68人の人々がいることが把握できました。



ミサ後に支援物資受け入れの大きな箱を準備して食品や衣類を入れてもらったり、募金をつくり活動を続けています。一番喜ばれたのは、お米でしたので、募金から5kgのお米24袋を随時購入し、それを届けています。また、健康保険を持っていない10世帯の家族には家庭用の常備薬が入った薬箱を届けています。昨年のクリスマスには、業務スーパーで、チキンとパンを購入してカードを添えて、すべての世帯に届ける事ができました。言葉のわかるアリスさんは、病院やハローワークに一緒に行き通訳や相談相手になっています。これからも、コロナ禍が続く限り、二つの教会が協力しながら支援活動を続けていきたいと思っています。

駒田 瑞穂（松木町教会）

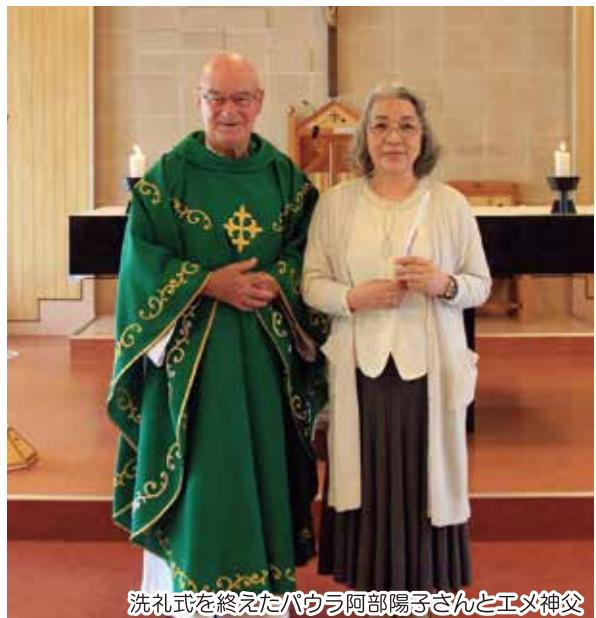
〈野田町教会〉洗礼式

6月27日(日)、野田町教会で洗礼式がありました。受洗された阿部陽子さんにお話をうかがいました。



阿部さんは幼稚園から短大までを桜の聖母学院で過ごす中、次第に洗礼を受けたい気持ちを固めていかれ、短大時代には受洗のための勉強を始められました。しかしさまざまな事情でタイミングが合わず、その時を待ち続けていました。その間も「いつも神様とつながりをもって生きたい」と強く確信を持っていらっしゃったそうです。

3年半前、ボランティアの仲間の方が当時コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の花園町修道院で仕事をしていたことがシスターから聖書の勉強をする機会を作っていただいたそうです。



洗礼式を終えたパウラ阿部陽子さんとエメ神父

50年間、確信して待ち続けていた洗礼を受けて、阿部さんは「とってもうれしいんです。もっと神様のことを知りたい。そのため自分自身、神様と向き合う時間を大事にし、その日関わられた方々のためにお祈りするようにしています」と話していました。

パウラ阿部陽子さん、洗礼おめでとうございます!!

渡邊 祐子（野田町教会）

福島県いわき市、泉、湯本、平で見た教会の感想

私は誓願 60 周年の節目に当たり、いわき市泉在住の友人宅で千葉県からの友達 1 人と 3 人で再会の喜びを持ちました。友人の近所で原発事故後富岡町から避難し茶室を構えた早川宅に招かれてひと時を満喫させていただきました。

その後、泉の「エリムの泉」を訪ねました。そこは原発事故で被災した福島第一聖書バプテスト教会の牧師さん方が神の計らいの下、多くの方の努力で建てられた教会で、憩いの場でした。公園のようなステキな感じの庭、その中央の奥に小さな礼拝堂があり、静かに祈れる場でした。鍵はなく誰でも入れるようになっていました。

となりの建物は軽い食事もできるお店で、店の奥には子どもたちのための絵本棚があり、子ども連れのお母さんもくつろげるような部屋になっていました。そこではお持ち帰りの弁当もできるとの事、友人が夕食のために頼んでおいてくださいました。お弁当は自然食らしくとてもおいしかった。

翌日、友人から「カトリック教会もぜひ見てください」との強い言葉で、いわき教会を初めて訪ねました。

広い敷地を持っていて、町の中心地にあり、泉のプロテスタント教会とは比べられないほど広く司祭住居も、聖堂も信徒集会の場も整っているのに、どこを回っても鍵がかかっていて人気もなく、車が 2、3 台停めてあるだけでした。車社会の時代なのに駐車場に貸してあげられないのかしらと、勝手に思いを巡らしました。いわき教会の聖堂は数百人も入れる立派な聖堂で、外側の扉の横には聖ドミニコ修道会のグローロー神父の名が記されていましたが形骸化された建物の様に感じました。

カトリック湯本教会への戻り道で、ノルウェーの宣教団に属する「平キリスト福音教会」を訪ねました。牧師さんも、教会受け付けの方も留守でしたがキリスト教書院の売店があり、高齢の男性が対応してくださいました。この方と話が弾み教会の中を見学させてくださいました。鍵を開けると礼拝堂につながっていました。この建物は震災後パチンコ屋さんだった人が寄付され改造したとの事ですが礼拝堂らしくできており、感心してしまいました。

礼拝堂には、折り畳みの椅子が 50 席並んでいました。壇上には聖書と DVD のセットが準備してあり、日曜礼拝の隔週は若者たちが 10 人くらい集まり、キーボードやギターで賛美できるのだそうです。この地域の人々の声に場所を提供し、悩める人の声に寄り添う、使命を抱く牧者がいるのでしょう。若い人も、年寄りも、自分たちの使命を真剣に考えている姿に感動すら覚えました。別れ際、「私は 85 歳です」とにこやかにおっしゃった男性に見送られ、湯本教会に寄りました。更地になっていて敷地の端にマリア像が立つ老朽化した信徒館を外から見ました。日曜日のミサはいわき教会から司祭が来ているそうです。

今は新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が出ているため私たちは感染予防対策の指針に従う事が必要なのでしょう。しかし、新型コロナウイルスを恐れるあまり、人が関わりを閉ざす忘却の教会を見た様に感じました。

人は感じ方が違うでしょうが、情報に振り回されないように何が眞実なのか学ぶ姿勢が大切であり、人の話を聞き、関わりを選び、自分で考え、この時こそ「福音に生きる」事を実践することが欠けていないか反省しなければと思いました。

教会は色々な人の集まりですがイエス・キリストを中心にみ言葉を福音の喜びを分かち合う共同体となって行く使命が信徒は誰でもあります。教皇フランシスコは「出て行きなさい」と呼びかけ、「広い心で受け入れる野戦病院となる教会であるように」と言われるのですから、私たちは「回心」神に向かう心を願わなければなりません。

牧者のいない民衆を眺めたイエス様は、まだ弱い信仰の弟子であっても派遣されました。神様は、信頼する者を探し、神様の働きに協力する人を待っているのだと感じます。

神様の声は身近にいる人の声を聴くことから始まるのではないでしょうか？ そして、教会は共同体の働きがなければ形骸化されます。それを強く感じた旅でした。

Sr. 相良 なるみ（聖ドミニコ女子修道会）

訃 報

洗礼者ヨハネ 川井 啓(ひらく)神父



仙台教区古川教会
小教区管理者川井啓
神父が、2021年10月
9日(土)早朝に老衰の
ため、帰天いたし
ました。95歳でした。
葬儀ミサは、10月
12日(火)元寺小路教
会大聖堂にて平賀徹
夫名誉司教司式で執
り行われました。

川井神父さま ご苦労さまでした

佐藤 守也 神父

川井神父さまは、私が神学校に入学した時の教区の神学生養成担当者でした。その頃は、学期が終わるごとに、川井神父さまの所に顔を出しました。いつも、挨拶もそこそこに立ち話程度で済ませました。なぜなら、その頃の私は司祭になれる自信が本当になかったからです。ですから、あまり思い出になるような事はないのですが、強く記憶に残った事が二つ程あります。

ある時、神父さまの左側を歩きながら「今日は暑いですね」と私が言いますと、「ええ、何?」と大きな声で顔の向きを変えて聞き返されました。神父さまは左耳が遠かったのです。私は、あまりにも大きな声で聞き返されたので、後の言葉が出てきませんでした。

もう一つは、神父さまと向かい合って座っていますと、そこに大きな犬が入ってきました。びっくりしていますと、神父さまは犬の頭をなでながら「名前はレオ、強い名前だろ、教皇さまにちなんでつけたんだ」とのこと。私は、ますます何を話せばよいのか分からなくなってしまったのです。

このたび、神父さまの訃報に接して真っ先に思ったことは、最後の司祭だったということです。何が最後かというと、昔は司祭の生活を支えてくださる家政婦さんがいて当たり前でした。そういう方に支えられながら、司祭には活躍する場がたくさんありました。そういう時代の司祭たちの最後の人になったということです。昔は、司祭には幼稚園教育をはじめ学校での宗教講話や社会福祉事業、それに求道者も多かったです。そんな忙しい司祭の活動を教区の信徒が一丸となって支えていました。しかし、今はこのような状況ではありません。

戦後の荒廃から復興し、豊かさが実感できるにつれ、教会や司祭たちにとって必ずしも良

〈略歴〉

1925年(大正14年) 10月10日生まれ
1956年 司祭叙階
↓
元寺小路教会 助任司祭
築館教会 助任司祭
古川教会 主任司祭
西仙台教会 主任司祭
古川東町カトリック保育園 園長
特別養護老人ホーム暁星園 施設長
2007年 引退 古川教会 小教区管理者
2021年 10月9日帰天 95歳



葬儀ミサ・告別式は、平賀徹夫名誉司教主司式で
たくさんの司祭が集まって執り行われた

い時代とは言えなくなりました。求道者は減り、召命も激減しました。島田神父さまが「ゼールス（ラテン語で情熱）がなくなった」とつぶやいたのをこの耳で聞きました。

時は更に進んで、現代はAIが人間のような知的能力を持つ時代になりました。しかし、AIに全ての判断を任せた時、世界はどうなるのでしょうか。イギリスのホーキング博士は、「そうなると地球は滅びる」と言いました。ここに来て、人間がどんな生き方をすればよいのか問われていると思います。

そんな時、日曜日に「知恵の書」が読まれました。ソロモン王は、主から「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と言わされた時、長寿や富や敵の命を求めず、知恵を求めたのです。これこそ、私たちが現代において聞くべきメッセージであると思いました。

司祭は、一般の人のような生き方をしていません。つまり、就職や恋愛、子育てなどの人生の節目がありません。何のためにそうするのでしょうか。それは、知恵を持って、私たちが生きている激動の中で、果たして神さまを見つけることができるのか、を問うためです。

司祭には、「気をつけて、目を覚ましていなさい」(マルコ 13:33)という使命が与えられています。川井神父さまは、「時」を見つめ神に尋ねる生涯を終えられました。長い間、ご苦労さまでした。これからは、神さまのそばから私たちを見守ってください。

2006年カテドラルで4人の司祭叙階50周年記念のお祝いがありました。

川井神父様は「結婚式もない、葬式もない田舎の教会で、私の目の黒いうちは、ミサをささげ続けます。」とごあいさつされました。

毎日ミサをささげ、ロザリオの祈り、聖務日祷、そして金曜日には「モーゼの民」の仕事がありました。

働き者の神父様で、信者になるのは誰でもなるが、信者であること、信者であり続けることはより大切な事と、教会のために汗を流すことを、教えていただきました。

「ロザリオの月に天国に行きたい」の神父様の願いがかないましたね。

これからは天国で見守ってください。

渡辺 征子（古川教会）

私が川井神父様にお会いしたのは高校二年の時で、高三のクリスマスに受洗しました。

川井神父様は真黒い髪と心の中を見抜くようなまなざしで、いつも神様のお話を熱くしてくださいました。あれから、たくさんお世話になり、父母息子嫁孫と洗礼を授けていただきました。

63年たった今年、神父様は神様のところに行かれました。私も、もうすぐです。

天国でまた、お会いできる信じて、神父様の永遠の安らぎをお祈りいたします。

川井神父様、たくさんありがとうございました。神に感謝。

竹花 しげ子（古川教会）

川井啓神父様が古川東町カトリック保育園の園長として赴任されたのは昭和52年4月でした。私が就職して2年目の年でした。あれから45年の月日がたちました。

最初の頃は職員会議の都度「いつでも門は開いているぞ」と言われ、保育士として人としての道を教えていただいたように思います。しっかり子どもたちを保育しなければ、いつでもやめていいんだぞという意味だったと思います。

怖いなあと思う反面、しっかり頑張らなければと、仕事に対する姿勢を教えていただいたと思います。

神父様は園長として、職員に子どもたちにキリスト教の精神を分かりやすく、4つの心「あいさつ、ありがとう、あたえあう、あやまりあう」とかみ砕いて教えてくださいました。

4つの心は保育園の保育方針として、今も子どもたち、職員そして保護者の方々の心に刻まれています。毎月の園だよりも「一分間 拝

借！」という欄に『4つの心』を聖書の言葉を交えながらコラムを掲載していました。（園長を退任して10年間程）

平成18年度まで園長を務められた神父様は、平成19年4月から園長神父様ではなく神父様として、聖堂で毎月1回の静修の日、七五三やクリスマスに神様のお話ををしていただきました。また、園長就任中は職員旅行も一緒に出掛けました。

思いおこすと、本当にたくさんの日々がよみがえってきます。

川井神父様は古川東町カトリック保育園の基盤を作ってくださいました。これからも、この保育方針にそって、私たちは子どもたちを慈しみ育んでまいります。

天国でも、子どもたちが、職員が、保護者が神様に喜ばれる人間像に近づけるよう見守ってください。

川井神父様、長い間、本当に疲れ様でした。ありがとうございました。

古川東町カトリック保育園 園長 平野 義子

川井神父様には、1990年に一家で関東から古川教会に転居して以来、長男、次男、長女の堅信、三男の幼児洗礼、堅信を授けていただきました。

私にとっては、復活祭前の告解の時に印象深い思い出があります。告解終了時に「それで終了ですか」と聞かれた私が「はい」と答えますと、神父様は「まだあるでしょう」とおっしゃったのです。

普段の神父様は喘息持ちで多少しゃがれていて時々急に声が大きくなる事があるのにこの時はとても柔らかだったのです。

今思えば、その時の私は、旧約聖書【列王記上 19.11-12】「大いなる強風、山を割き岩を碎きしが……火の後に静かなる細き声ありき（主の御前には非常に激しい風が起り、山を裂き、岩を碎いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかつた。地震の後に火が起こつた。しかし、火の中にも主はおられなかつた。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。）」を無意識に感じ取つたのかもしれません。

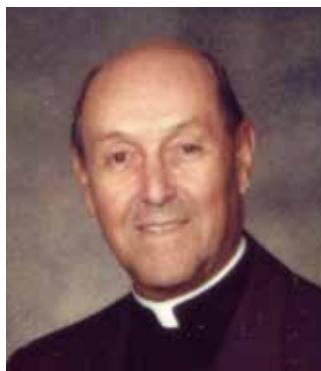
人が自分の事だけに夢中になっている時には、神の声を聞くことは難しいものです。

この時の川井神父様のお声は聖書が語る「静かなる細き声（静かにささやく声）」だったのだろうと今の私には思われます。

今までの数多くの事を感謝します。神父様のご冥福を心からお祈りします。

櫻井 清近（古川教会）

ジャン・ルイ・フォーレ神父（ケベック外国宣教会）



2021年3月6日
カナダのケベック外
国宣教会で老衰のた
め帰天されました。
94歳でした。

来日後、1952年八
戸塩町・鮫町教会助
任司祭。1954年鮫
町教会主任司祭。

1956年6月仙台に着任、聖ウルスラ学院中
学校の一室を借りて宣教活動を開始、一本杉教
会を創立し、1964年まで初代主任司祭、その後
五所川原教会主任、宣教会業務を経て1974年～
1982年一本杉教会 第3代主任司祭を務められ
ました。その後、ケベックに帰り、宣教会の業
務をされました。

2006年一本杉教会の50周年祭にはカナダか
ら駆けつけてくださいました。

ジャン・ルイ・フォーレ神父様との思い出

久ヶ澤 萬里子（一本杉教会）

フォーレ神父様、天国はいかがでしょうか。
懐かしい皆様と再会し楽しく過ごされています
でしょうか。

神父様との出会いは、私が小学校4年生の時
でした。私の姪がウルスラ幼稚園に入園したこ
とから、姉に連れられてミサに行きました。

背の高い外人さんで大きな手で「こんにちは」と握手されました。

そして、「神様の勉強をしましょう」と言われ、
シスターと一緒に勉強会が始まりました。

神父様は、地域住民の宣教にはとても熱心で
した。

クリスマス前には、地域の方に「クリスマス
を教会で過ごしませんか」とカードを一軒一軒
手渡して歩きました。小学校の私は神父様とペ
アでした。水をかけられそうになったことも覚
えています。

深沼海岸で豚汁パーティー、盆踊り大会、秋
保温泉へ日帰り旅行など楽しいことも沢山あり
ました。青年会立ち上げ、レジオ・マリエ、七
郷地区での日曜学校。

聖母月には信徒の家で、ロザリオの祈り会を
しました。こうして、あちらこちらで宣教の種
がまかれました。

私が堅信を受けた時、神父様は一人の退役者
をペンフレンドとして紹介し、その人のために
祈り、友達になって欲しいと言われました。そ
の方が、死刑執行になるまで文通が続き、一本
杉教会で葬儀を行い、神父様はその後もその方
の家族のお世話をしていました。

神父様の厳しい信仰生活は、私の中に種を蒔
いたように思います。

今的一本杉教会共同体の基礎をつくってくだ
さった神父様でした。

天国でも厳しく、優しく信徒を導いていらっしゃることでしょう。

Sr.マリ・レオンティヌ・デ・ラ・サント・ファス 渡辺 洋子（ドミニコ会 ロザリオの聖母修道院）



〈略歴〉

1924年 4月17日生まれ
1954年 11月15日 初誓願
2021年 5月3日帰天 98歳

Sr.マリ・アルベル・デ・サンジュ 西野 節枝(さだえ)

（ドミニコ会 ロザリオの聖母修道院）



〈略歴〉

1923年 3月17日生まれ
1955年 5月10日 初誓願
2021年 8月30日帰天 99歳

Sr.マリ・マルタン・デュ・プレシュサン 梅津 秀子（ドミニコ会 ロザリオの聖母修道院）



〈略歴〉

1934年 2月8日生まれ
1965年 4月29日 初誓願
2021年 8月1日帰天 87歳

司 祭 紹 介

ヨセフ 佐々木 博

○生年月日
1935年(昭和10年)
3月3日

○出身地
福島県南相馬市

○司祭叙階
1963年6月8日
カナダ オタワ司教
座聖堂



司祭を志したきっかけ

福島県立原町高校の3年の春、原町教会を初めて公式訪問なさった小林有方司教様に、「君、君、これからどうするの。」と、突然廊下で呼びかけられました。「東北大學を目指して受験勉強中です。」と、返事したところ、「どうだ、上智に入ってみないか。もし、上智に入学できれば、東京の神学校にも入ることができるよ。しかも、チャンスがあれば、留学もできるよ。」とのお誘いをいただきました。

早速、母に(父は34歳で旧満州にて病死)相談し、司祭になりたいという気持ちを伝えたところ、「実は、私もそれを望んでいたのよ。」と快く承諾してくれました。

司祭として58年間奉仕して

カナダの首都オタワで、仙台教区の初代司教ルミュー大司教様によって司祭に叙階され、その後三年間、オタワにある聖パウロ大学の大学院で教会法の勉学に励みました。その間、オタワ市の郊外にある小教区で学生司祭として司牧の貴重な経験もしました。

仙台教区に戻ってからは、教区事務所で、また宮城県と岩手県、青森県のそれぞれの小教区で宣教・司牧を積み重ねました。

また、地区制度が導入されてからは、それぞれの地区で他の司祭たちとの連携による働きに切り替わりました。特に第6地区の協力司祭として、痛感していることは、それぞれの小教区の宣教・司牧への実際の関わりの不十分さです。つまり、気を付けないと司祭は、主日にミサをささげて、来月までさようならと極めて限られた奉仕しかできないという現状です。

とにかく、仙台教区は、東日本大震災を経験し、「新しい創造」計画に導かれて10年、開かれた教会となって歩み続けてきたのですが、教会本来の使命である福音宣教に向けての信徒の生涯養成が、優先課題として残っているのではないかでしょうか。

具体的には、まず、信者の家庭が「家庭教会」として、特に子どもと若い世代の信仰教育を実践する。そのためには、まず親たちの信仰の生涯養成を実施すること。

この信仰の生涯養成の要は、聖書の学びであります。それは、各小教区で、全員参加で定期的に実施すること(教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』175項参照)。

さらに、教皇フランシスコが強調しているように「出向いて行く教会」になれるように(同上20-21項参照)、教会活動を地域に開かれた方向に切り替えること。

そして、訪日された教皇フランシスコが、バチカンに戻られ、一般謁見で強調なさったように日本が「世界平和実現」のため、また「地球環境を守る」ための主導的な国となるように(『すべてのいのちを守るため:教皇フランシスコ訪日講話集、108頁参照』)、そのため日本のカトリック教会が先駆者となることができるよう願っています。

洗礼者ヨハネ 森田 直樹

○生年月日
1965年(昭和40年)
6月23日

○出身地
京都府京都市

○司祭叙階
1993年4月25日
京都カテドラル
河原町教会



みなさん、こんにちは。洗礼者ヨハネ 森田直樹と申します。私は1965年6月23日に京都で生まれました。未熟児で病弱でしたが、今では、そう思えないくらい、健康に成長させていただきました。それから、カトリックの中学校、高校を卒業するまで京都で過ごしました。

司祭を志したきっかけ

司祭叙階は1993年4月25日で、京都カテドラルの河原町教会で京都教区司祭として叙階されました。司祭になりたいと思ったきっかけですが、実は、高校2年生に洗礼を受ける頃と時期が重なります。高校1年の倫理社会の先生が、ある神父様でした。初夏の暑い日、おそらく葬儀の帰りに学校に来られたのだと思いますが、黒いローマンカラーの礼服(ステン)を私たちの前でお脱ぎになりました。ジレというのですが、金太郎さんの前掛けのような司祭の衣装を目の当たりにして、大笑いしたのを覚えています。同時に、飾ることなくご自分をさらけ出された神父様に心惹かれるものがあり、「神父様の本職を見に教会に出かけても良いですか」とお願いしました。神父様は「いいですよ」と言ってくださいましたが、残念ながら、その翌年、神父様はガンで帰天され、これはかないませんでした。神父様の葬儀は学校の授業があつて、参列できませんでしたので、通夜に参列しました。ロザリオの祈りの間、おばさま方のヒソヒソ声がどこからか聞こえてきました。「この神父様が亡くなつて、京都教区も司祭が少なくなるわね」と。そんな声を聞いて、「こんな僕でも神父になれるのだろうか」と思つてしまつたのが、司祭召命のきっかけです。

大切にしていること

司祭になった時、田中健一司教様から「司教に金を願わず、願われた仕事は断らず」と、教えていただき、それを守っていたら、あつという間に年月が過ぎてしまいました。今でも、基本的にスケジュールが空いていれば、願われた仕事は断らず、をモットーにしています。また、司祭としてもう一つ大切にしようとしていることは、いろいろな出会いを大切にしたいと思っています。日々の祈りの中で、今までの出会いに感謝しつつ、いろいろな人たちのためにお祈りをささげさせていただいている。

仙台教区内の信徒に望むこと

仙台教区に限らず、日本の教会について思うことですが、「信仰の喜び」が十分に証しされていないように感じています。信仰は重荷や苦行ではなく、喜びそのものだと思います。神様の恵みに日々満たされて、喜びのうちに私たち一人一人は世に遣わされているのだと思います。毎日しっかりと神さまのあふれる恵みを受け止めていきたいと思います。

最後になりましたが、東日本大震災、大津波の後、京都教区から仙台教区に派遣されて10年が経ちました。今までの歩みは、皆さまのお祈りにいつも助けられていたのだと思います。今までのお祈りに感謝申し上げるとともに、これからも、お祈りをよろしくお願いいたします。

仙台教区カテドラル(元寺小路教会)の
鐘の塔と十字架



編集後記

皆さんの投稿に支えられ、教区報を完成することができました。コロナ禍で、自粛されていた様々の活動も、これからは徐々に再開していくことでしょう。皆さまがたのご活躍をお祈りいたします。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

sendaikyoukuho@gmail.com

次号発行予定日：4月17日(日) 原稿締め切り：1月末日